

3 実 施

- イ① 第一回 1957年9月18日、赤濱町地先オカワ干瀬の東方に接続する深の糸満よりの地点を調査した所水深1尋内外でホンダワラ類が相当繁っておりそれに交って海人草も他所より比較的が多かったので、此地で母藻を採取した。母藻採取位置の藻類の糸満寄りに（オカワ瀬と喜屋武岬の見返し兼上）に水深1.5-2尋位、岩礁で藻類の少ない場所に投入した。
- ② 第二回 9月18日受盤のセメント盤より母藻を本10月3日投入の盤に移しかえるため実施現場に行つたが、前回分の盤はウェイ台風の被害を受け三盤は反転し、10盤中2盤だけ母藻を残し他は流失していた。
- ③ 第三回 10月8日流失種石補充のため、藤伊干瀬より種石を採取（遠隔ではあるが海人草多く採取容易のため）し、第二回投盤のセメント盤に添付した。
- ④ 第四回 10月24日、第三回目投盤、水温26℃、一般に母藻の株が少なくなつたように感じられた。シラヒゲウニが多く、その一個が海人草の株の上に附着していたが、これらの被害か或は他の魚類のためか不明。
- ⑤ 第五回 1958年9月25日、投盤3回分30盤の取揚をした。

4 結 果

第一回投盤より第三回投盤まで30盤の投盤を図つたが、海人草の着生は1株も発見されず、種石の母藻までその根跡を認められなく、皆無の状態であつた。各盤共に若干の砂を被っていた。

5 考 察

海人草の着生を見ない理由として①投盤当時は時期的に嚢子放出の盛期を過ぎていたことであつた事、②遠隔地の為管理が不充分であつた点、③種石母藻が少なかった点等が考えられる。従つて今後は嚢子放出の盛期をよく調査して盛期に然も管理のよく行届く場所に投盤すること、種石母藻は健全に繁殖しているものを使用すること等が考えられる。

調 査 及 び 指 導

1. 伊奈武瀬調査 (3回) 1957年7月12日

① 概観

